

課題3 高大接続改革の趣旨をふまえた入試改革

各大学で検討中の新入試への対応は、高校生の受験準備に大きな影響を与えることから、2018年度内には予告・公表を行う必要

【図表4】新入試への対応は待ったなし～新入試対応のスケジュール(例)

年度 新入試 当該学年	2018年度				2019年度				2020年度			
	高1生				高2生				高3生			
クォーター	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
新入試への対応	受験生の準備に大きな影響を与える事項の予告				追加(詳細)情報の公表、新入試対応の周知				高校での受験準備がスタート 入試説明会、入試要項公表 募集開始 新入試スタート			

があるだろう。具体的には、①大
学入学共通テスト(以下、共通テ
スト)における外部英語検定試験
と共通テスト英語試験をどう活用
するか②共通テストの記述式問題
をどう活用するかと個別試験での
記述式問題の出題について③主体
性等の評価方法など学力の3要素
を各人試方式でどう測るのかの3
点と、これらの対応に伴う入試方
式や教科・科目の変更などにつ
いて情報提供が必要だ。

検討にあたっては、今回の入試
改革は大学教育、高校教育の改革
とセットで、新しい時代に必要と
される資質・能力の育成をめざし
ている点を学内で確認しておきた
い。そうすることで入試改革の必
要性といった「そもそも論」で検
討が滞ることはなくなるだろう。
高校向けの説明では、なぜその
ような対応なのかを、入学後の学
修プログラムなどと関連させて説
明すると説得力が高まる。選抜方
法が大きく変わることへの高校側
の不安は大きい。ゆるやかな対
応から始めることで高校の不安
を低減させることも考えたい。

課題4 教育・研究における国際競争力の強化

グローバルに活躍する人材や、
イノベーションを起こす人材の育
成を高等教育に期待するならば、
大学は「多様な人々が集い、知的
刺激を受け合う魅力的な場」に
なっている必要があるだろう。大
学のグローバル化は、社会が
Society 5.0(超スマート社会)
へと変革しようとしていることと

【図表5】被引用論文と国際性が低い日本の大学
～100位以内に入ったアジアの大学の分野別スコア * ()内は前回

順位	国/地域	教育機関	教育	研究	被引用論文	産業界からの取入	国際性	総合
=22(24)	シンガポール	シンガポール国立大学	77.4	88.2	81.3	61.9	95.8	82.8
=27(29)	中国	北京大学	83.0	85.1	74.2	100.0	53.0	79.2
30(35)	中国	清華大学	80.2	93.2	71.4	99.8	41.0	79.0
40(=43)	香港	香港大学	68.8	77.9	74.2	54.0	99.5	75.1
44(49)	香港	香港科技大学	55.2	68.4	93.1	58.1	83.4	72.7
46(39)	日本	東京大学	79.5	85.2	63.7	52.7	32.2	72.2
52(54)	シンガポール	南洋理工大学	49.5	63.0	90.7	94.0	95.9	70.5
58(76)	香港	香港中文大学	57.0	64.4	80.6	56.8	86.6	68.5
=74(=91)	日本	京都大学	71.8	78.6	50.9	93.8	28.8	64.9
=74(=72)	韓国	ソウル大学	69.3	71.2	60.6	79.8	34.1	64.9
=95(=89)	韓国	韓国科学技術院(KAIST)	56.3	59.2	70.4	100.0	35.6	60.9

歩調を合わせた、高等教育におけ
る変革としても捉えることができ
る。
しかし、日本の現状はどうだろ
うか。【図表5】では、THE世界
大学ランキング2018で100
位以内に入ったアジアの大学の分
野別スコアを一覧にしている。日
本の大学では、東京大学と京都大
学の2校のみのランキングにとど
まり、両大学とも他国の大学と比
べて、被引用論文と国際性のスコ
アが低く、課題である。

一方、日本の高校では高大接続
改革により、英語4技能や探究学
習などの指導が進んでおり、国内
の高校生が海外の大学を受験する
ハードルは下がりがつつあると言え
る。現に東大合格者数トップの開
成高校では、2017年度入試に
おいてハーバード大などの海外の
大学に22人の合格者を出してい
る。
日本の高校生が世界基準で進学
先を選ぶ時代はすぐそこまで来て
いる。世界市場から学生を呼び込
むことをイメージした魅力づくり
とその広報を考えたい。

課題5 改革の原動力としての内部質保証の実質化

これまで述べてきた環境変化に
対して各大学が主体的に対応して
いくためには、活動や施策の改革・
改善を大学自らが推進していくし
くみや組織風土が必須である。

第3期認証評価では、3ポリ
シーと内部質保証が新たに評価項
目として規定された。中でも内部
質保証は重点評価項目に設定され
ている【図表6】。例えば大学基準
協会では、第3期の認証評価基準
において内部質保証を理念・目的

【図表6】内部質保証の確立を重視した
第3期認証評価
～評価内容の充実のために新たに規定された事項

新規追加の 評価項目	▶大学における教育研究活動等の見直しを継続的に行う 仕組み(以下「内部質保証」という。)に関する事 ▶卒業の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関 する方針並びに入学者の受入れに関する方針に関する事
重点評価 項目の設定	▶内部質保証に関する事については評価において重視す べき事項とすること

*文部科学省「学校教育法第百十條第二項に規定する基準を適用するに際して
必要な細目を定める省令の改正について」2016年3月より

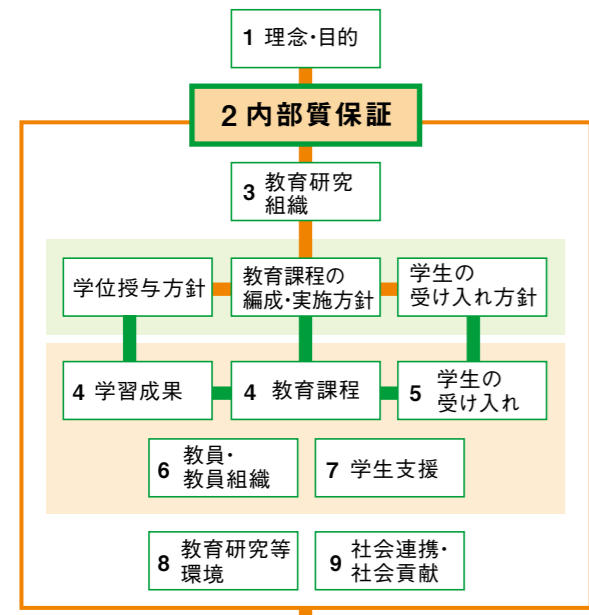
に次ぐ2番目の基準に位置付け、
各大学の理念・目的の実現を推進
する全学的なしくみとして、その
重要性を強調している【図表7】。
このように重要性を増している
内部質保証だが、実質化のポイン
トはどこにあるのだろうか。内部
質保証は「大学における教育研究
活動等の見直しを継続的に行う仕
組み」【図表6より】であるので、
全学的にPDCAサイクルが適切
に、そして継続的に機能している
ことが、実質化のポイントだと言
える。PDCAサイクルを回すう
えでは、「P(計画)」を「C(検証)」
できるようにして「A(改善)」を
適切に機能させることが重要で、
「学修成果の可視化」は避けては
通れないテーマだ。
PDCAサイクルを回し続ける
には、各自が自主的に取り組む状
態をつくるのが一番効果的。皆
で議論して改善策を決める、取り
組みの中で学生の成長を実感でき
るといった「やる気」を刺激する
ような組織運営を意識して、改革
に意欲的な風土を醸成することが
必要だろう。

内部質保証の実質化はIRの実質化から始まる

今号の特集ではIRを取り上げ
ている。大学の入口と出口の2つ
の環境変化に対応するための5つ
の課題の中で、内部質保証の実質
化は扇の要に位置し、その成否が
これら課題への取り組みに大きく
影響を与えると考えたからだ。

内部質保証の実質化では、学修
成果の可視化や、改革に意欲的な
組織風土の醸成をポイントとして
挙げたが、これらはIR活動の実
質化によって成し遂げられるもの
だ。データを組み合わせる分析す

【図表7】内部質保証が全学的に
機能することを重視
～第3期認証評価における新大学基準の構造(大学基準協会)



*大学基準協会の資料より
*図中の数字は
新大学基準の項目番号

ることで見えにくいものを可視化
する、データを基に皆で議論をす
る中で課題を共有する——データ
とうまく付き合うことは、先に挙
げた5つの課題を解決する糸口に
もなるだろう。
18歳人口の減少期移行や新入試
対応など、多くの課題が待ち受け
る2018年。全学を挙げて課題
に立ち向かうことが不可欠だ。ま
ずはデータを基に自学が置かれて
いる状況を皆で共有することから
始めてはどうだろうか。